

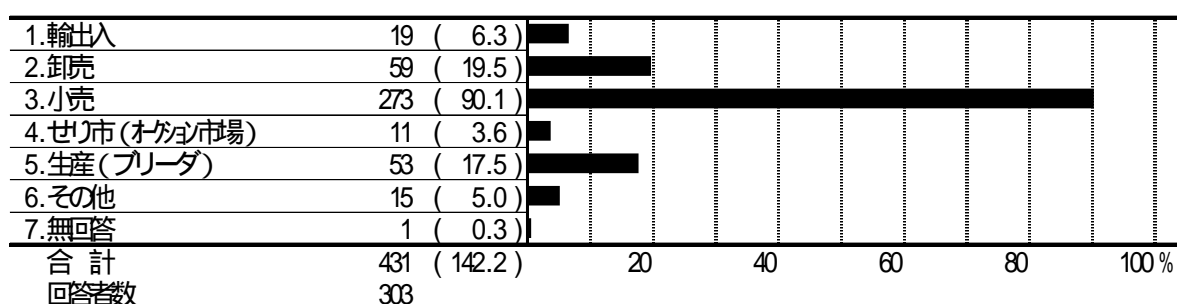
. 哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の調査結果

・哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の調査結果

1. 回答事業者の概要

平成 14 年度のアンケート調査に回答したペット動物取扱業者の業種は、小売が 90.1% と最も多く、次いで、卸売（19.5%）、生産（17.5%）の順となっている（複数回答）。動物取扱頭数の多い輸出入業は 6.3% しかなく、数社でほとんどの輸入を取扱っている構造となっている（図表 46）。

図表 46. 業務区分（回答者数：n = 303、複数回答）



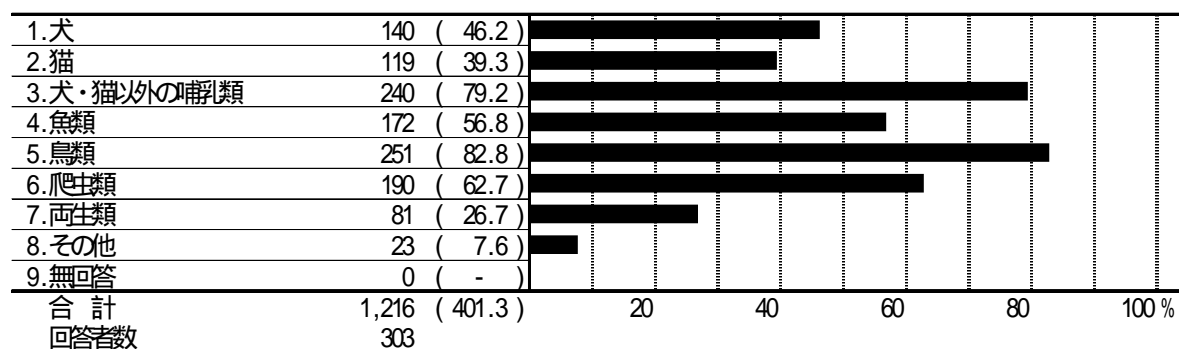
取扱業者を、その取引内容から 6 区分に分けた。業者数では「小売」のみの形態が最も多く、次いで「卸売 + 小売」となる（図表 47）。なお、この業務形態は各事業所の全体をさしており、犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類といった動物種別では若干の違いがあると思われるが、今回の調査ではそこまで把握できていない。

図表 47. 回答業者の業務形態

形 態	割合 (%)
1. 輸出入 + 卸売 (+ 小売)	6 社 (2.0%)
2. 卸売 (+ 生産)	13 社 (4.3%)
3. 輸出入 + 卸売 + 小売 (+ 生産)	11 社 (3.6%)
4. 卸売 + 小売 (+ 生産)	30 社 (9.9%)
5. 小売 (+ 生産)	232 社 (76.6%)
6. 生産 + その他	10 社 (3.3%)
7. 無回答	1 社 (0.3%)
計	303 社 (100%)

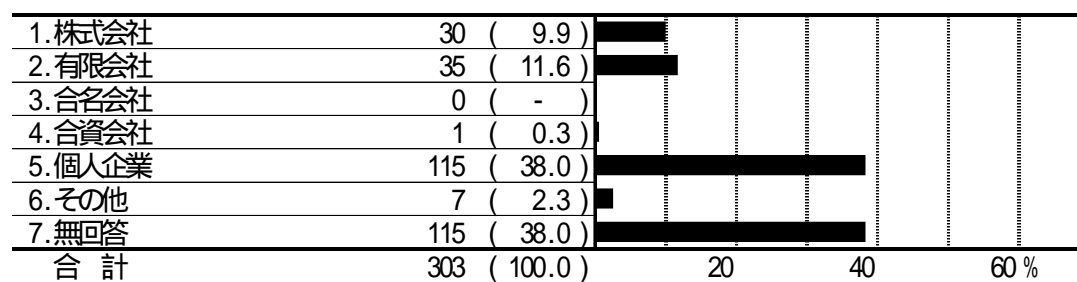
平成 14 年度調査における取扱動物の種類は、鳥類が 82.8% と最も多く、次いで、哺乳類（犬・猫を除く）が 79.2%。以下、爬虫類（62.7%）、魚類（56.8%）、犬（46.2%）、猫（39.3%）の順となっている（図表 48）。

図表 48．取扱動物の種類（平成 14 年度調査）（n = 303、複数回答）



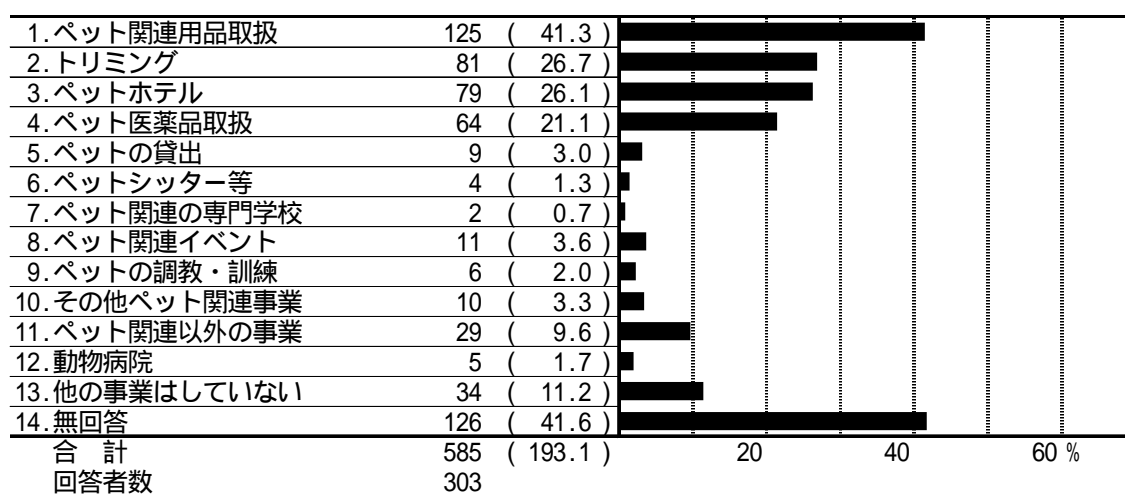
哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類取扱業者に対して経営形態を尋ねたところ、最も多かったのは個人企業で 38%。有限会社が 11.6%、株式会社は 9.9%であった（図表 49）。

図表 49．経営形態（n = 303）



哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の取扱業者に対して、動物生体販売業以外に何か事業をしているかを尋ねたところ、ペット関連用品取扱が 41.3%と最も多く、次いで、トリミング（26.7%）、ペットホテル（26.1%）、ペットの医薬品取扱（21.1%）の順となっている。なお、「他の事業はしていない」は 11.2%である（図表 50）。

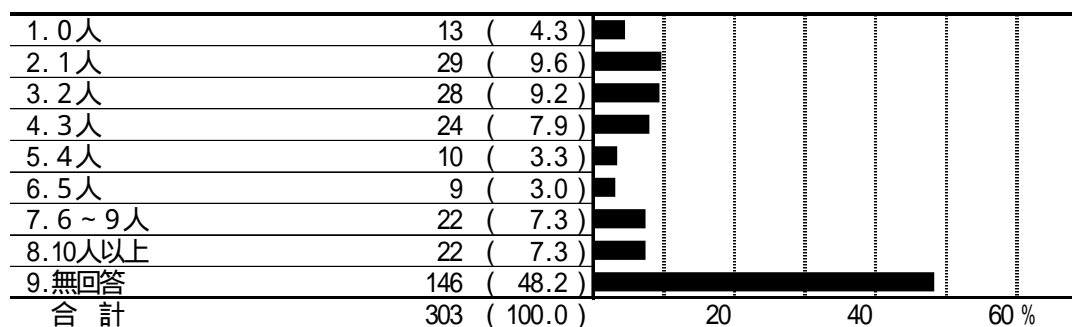
図表 50 . 動物販売業以外の事業 （ n = 303、複数回答 ）



哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類取扱業者に対して、従業員数を尋ねたところ、従業員総数は 1 人が 9.6%、2 人が 9.2%、3 人が 7.9%となっている（図表 51）。また 0 人は 4.3%であった。反対に 6 人～9 人が 7.3%、10 人以上 7.3%で、従業員は多くが 3 人以下のところと 6 人以上のところに分かれている。従業員総数の平均は 8.8 人（正社員数の平均：5.1 人、非正規社員の平均：2.7 人）で、男女別では男性正社員数は 2.7 人、男性非正規社員数は 0.8 人となっており、一方、女性正社員数は 2.4 人、女性非正規社員数は 2.9 人で女性非正規社員数をもっとも多い。

図表 51 . 従業員総数 （ n = 303 ）

平均値：8.8 人



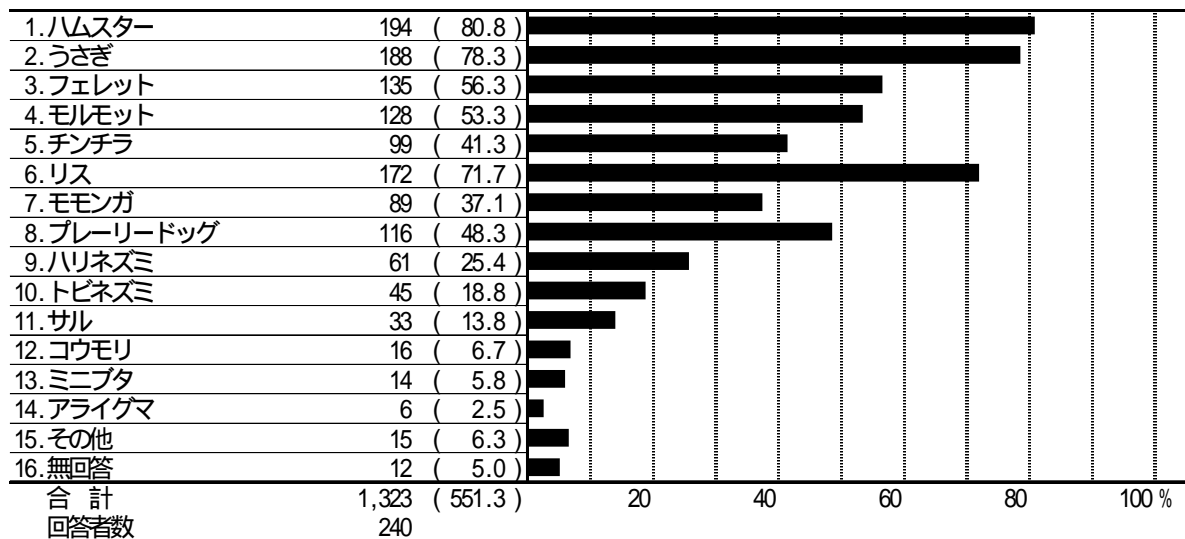
2. 犬・猫を除く哺乳類の取扱状況と流通経路

犬・猫を除く哺乳類を取扱う業者は回答業者 303 社中 240 社であった。この業者が仕入れた種類は多岐に渡っている（図表 52）。最も多くの業者が扱った犬・猫を除く哺乳類が「ハムスター」で 8 割が回答している。以下、「うさぎ」（78.3%）、「リス」（71.7%）、「フェレット」（56.3%）、「モルモット」（53.3%）、「プレーリードッグ」（48.3%）となる。

240 社が扱った犬・猫を除く哺乳類の種類数の延べ数は 1,323 となり、卸から小売まで平均して 1 社あたり 5.5 種を扱っている計算となる。

なお、その他の犬・猫を除く哺乳類にはジャービル、パンダマウス、ハツカネズミ、スナネズミ、カヤネズミ、トゲネズミ、モモンガ、ムササビ、ヤマネ、ヤマアラシ、スカンク、ハクビシン、ワラビー、アルマジロ、マーモセットなどが挙げられている。

図表 52. 取扱のある犬・猫を除く哺乳類の種類 （n = 240、複数回答）

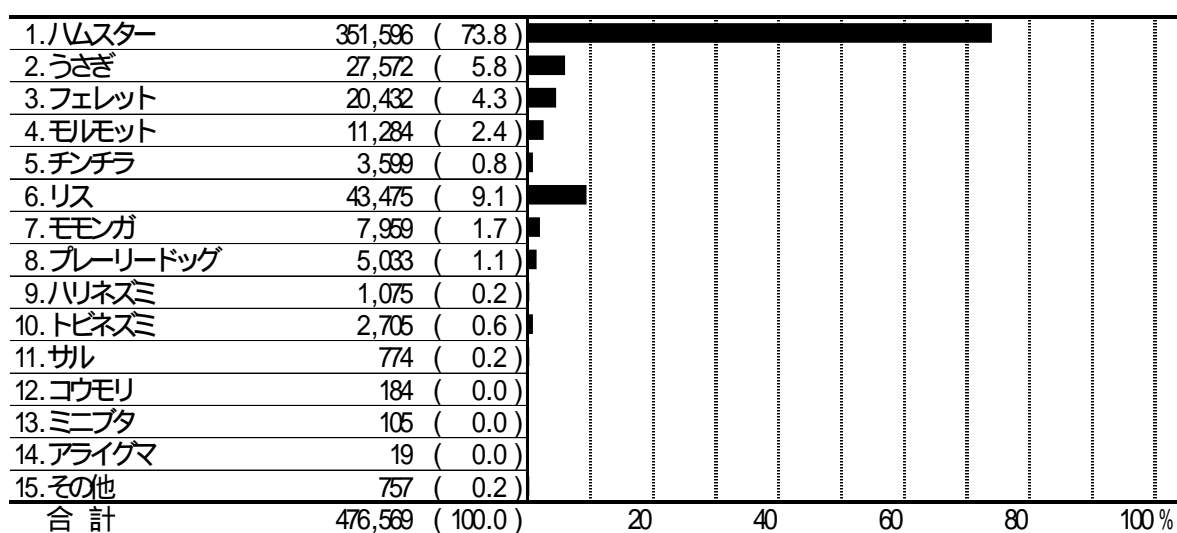


図表 53 は各事業者が仕入れた犬・猫を除く哺乳類をその頭数でみたものである。種類では多岐に渡った回答も、その取扱数で見ると圧倒的に「ハムスター」が主流であることが分かる。

なお、この頭数は流通経路にある全数ではなく取扱数の延べ合計であり、卸から小売に流れ、それが飼養者に渡れば同じ生体が2回カウントされる。

犬・猫を除く哺乳類流通の主要な種類は「ハムスター」(73.8%)で、「リス」(9.1%)、「うさぎ」(5.8%)、「フェレット」(4.3%)とは大きな差がある。

図表 53 . 犬・猫を除く哺乳類取扱延数 (n = 240、複数回答、単位：頭)



犬・猫を除く哺乳類の仕入先を各事業者の業務形態ごとにみると、輸出入・卸業者は自社輸入のほか別の卸売業者やブリーダーからの仕入れがある。また、卸売業者は輸入業者からの仕入れのほか、他の卸売業者からの仕入れも少なくない。

犬・猫を除く哺乳類では卸売業を中心に自社生産が約7千頭、小売業を中心に一般個人からの仕入れが約7千頭みられる。この調査での確実な犬・猫を除く哺乳類の国内生産数は、ブリーダーと自社生産の計の約38,000頭となる。

図表 54 . 業務区分別仕入先 (n = 240、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 自社で輸入	2. 輸入・輸入兼卸売業者	3. 卸売業者	4. せり市	5. ブリーダー	6. 自社生産	7. 一般個人
全体	回答者 頭数	477 473,731	19 206,143	67 96,498	162 116,036	41 9,884	48 30,629	62 7,238	67 7,190
1. 輸出入	回答者 頭数	10 273,960	5 195,042	0 0	1 58,442	0 0	3 20,476	0 0	0 0
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	30 41,914	3 8,715	6 15,124	7 11,595	1 2	5 3,180	5 3,255	2 43
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	24 23,369	5 1,443	3 18,890	3 98	0 0	3 196	6 2,276	4 466
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	74 61,946	3 181	11 37,124	16 10,208	7 4,864	10 5,200	11 875	14 3,494
5. 小売(+生)	回答者 頭数	336 72,488	3 762	47 25,360	134 35,666	33 5,018	27 1,577	38 805	47 3,187
6. 生産+その他	回答者 頭数	3 54	0 0	0 0	1 27	0 0	0 0	2 27	0 0

犬・猫を除く哺乳類の販売先は輸出入・卸業者から小売業への流れが大きい。

図表 55 . 業務区分別販売先 (n = 240、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 直接販売	2. 小売業者	3. せり市	4. 卸売業者	5. 輸出	6. ペット目的以外購入者	7. その他
全体	回答者 頭数	314 461,676	212 115,918	39 244,447	11 14,246	25 78,977	2 1,095	13 6,618	2 375
1. 輸出入	回答者 頭数	13 273,932	2 17,850	4 186,419	0 0	3 63,700	0 0	3 5,963	0 0
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	26 38,581	4 4,323	10 27,721	2 557	5 4,449	2 1,095	2 436	0 0
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	13 25,151	7 23,760	4 1,340	0 0	0 0	0 0	2 51	0 0
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	51 58,079	20 5,523	9 28,495	4 12,952	12 10,611	0 0	3 145	1 353
5. 小売(+生)	回答者 頭数	206 65,802	178 64,393	12 472	5 737	4 184	0 0	2 16	0 0
6. 生産+その他	回答者 頭数	5 131	1 69	0 0	0 0	1 33	0 0	1 7	1 22

図表 56 は、アンケート調査やヒアリング調査等に基づき、犬・猫を除く哺乳類の流通経路を各流通段階に分けて整理したものである。

頭数ベースでみた流通量を多い順に 5 つまで整理すると以下の通りである。

- 「海外」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 196,500 頭）
- 「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 187,800 頭）
- 「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 64,400 頭）
- 「輸入、卸、小売」から「卸売業」に向かう流れ（年間約 63,700 頭）
- 「卸売業」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 58,500 頭）

外国からの動物取扱業者輸入量は年間約 20 万 6 千頭である。ペット動物の輸入については、大規模に取扱う数社の輸入業者以外は個人輸入に近い小規模な業者が多いことから、この約 20 万 6 千頭という数値は輸入数量のほぼ全体を網羅しているものと考えられる。輸入されたペット動物の国内での流通については、そのほとんどが輸入・卸業者を経て小売店に流れている。ブリーダー（約 3 万 1 千頭）や卸売の自社生産（約 7 千頭）など、一部国内生産があるが主流は輸入である。

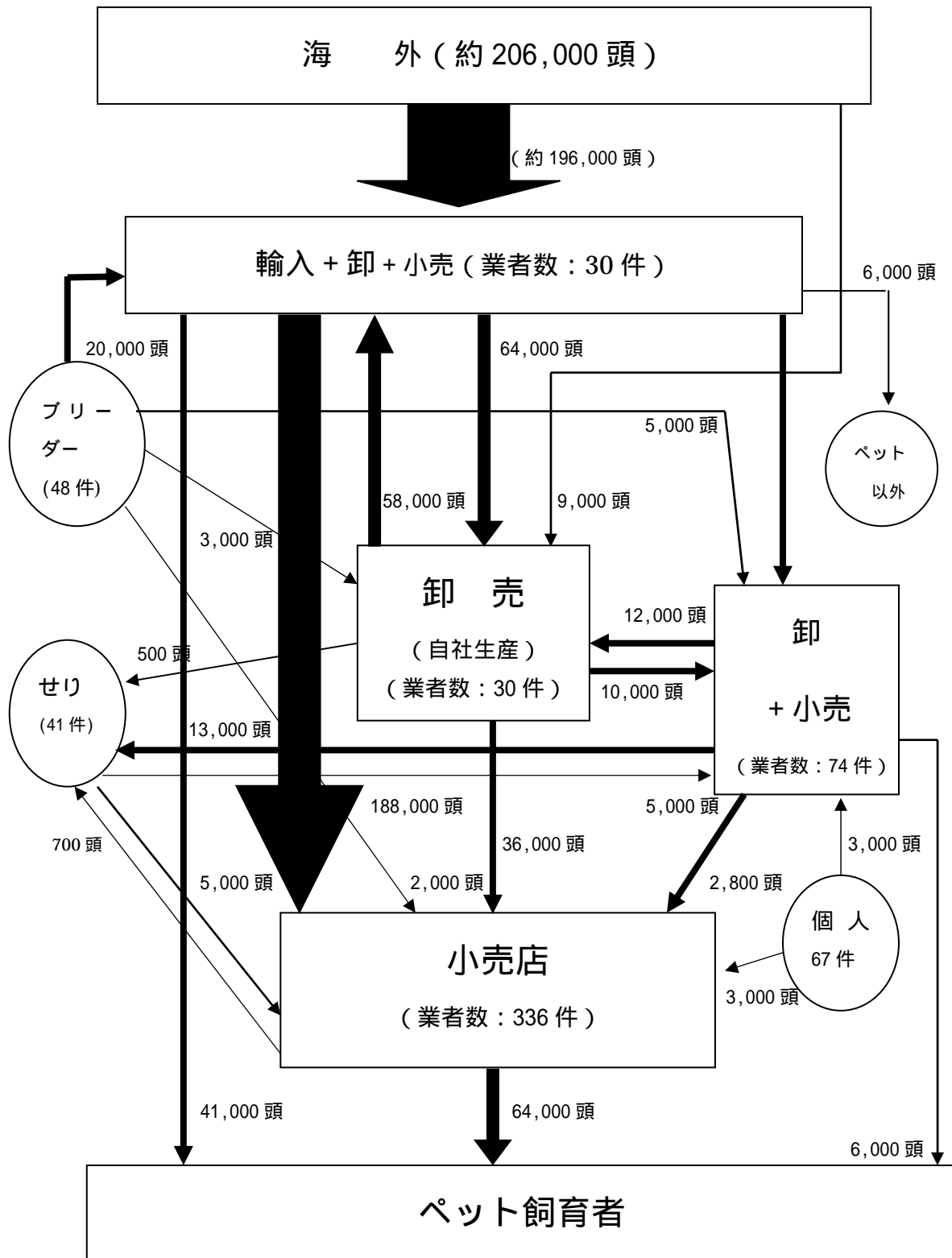
犬・猫を除く哺乳類はハムスターを中心に動物種のバラエティに富んでおり、業者間取引も多く、ルートが複雑に絡み合っている。

流通上に個人があるが、これは購入した動物を飼いきれなくなったものや、飼っているうちに増えた生体を、小売店に引き取ってもらうケースなどがあるという。

犬・猫と異なり、すべてが生まれてすぐの取引ではなく、成長した生体の販売も多い。そのため、在庫の割合が犬・猫に比べて多く、また在庫期間に子供が生まれて増えることもしばしばみられる。これも卸売の自社生産にカウントされる。

この調査で明らかとなった輸入頭数と国内生産頭数を合わせると 24 万頭強となるが、ペット飼養者へは 11 万頭程しか流れていない。この差については、アンケート調査に回答した小売業者数がわずかに 336 件で、実際にはさらに多くの販売事業者がいることが主な要因と思われる。

図表 56 . 哺乳類（犬・猫を除く）の主な流通経路

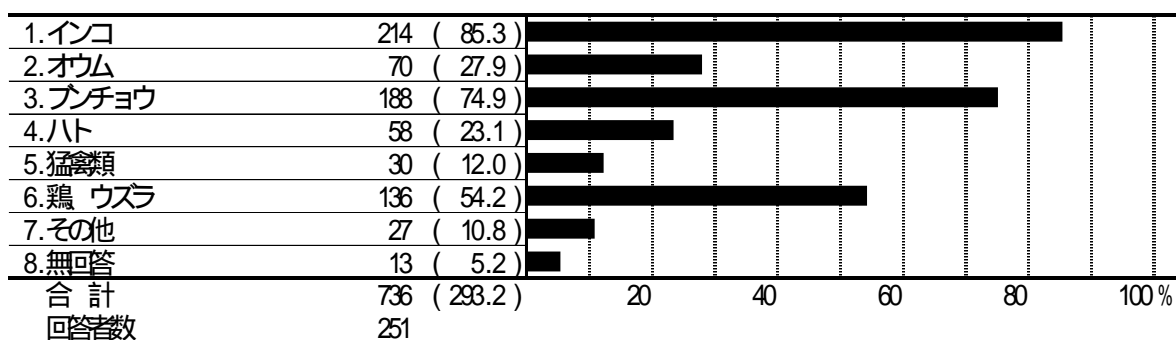


3. 鳥類の取扱状況と流通経路

鳥類を取扱う業者は回答業者 303 社中 251 社であった。この業者が仕入れた種類は多岐に渡っている。最も多くの業者が扱ったのが「インコ」で 85% が回答している。また、フィンチ類を代表させた「ブンチョウ」が 74.9%、「鶏、ウズラ」が 54.2% となっている。

251 社が扱った鳥類の種類延べ数は 736 となり、卸から小売まで平均して 1 社あたり 2.9 種を扱っている計算となる。ただし、フィンチはすべてブンチョウにまとめていることや、インコ、オウムにも多様な種類があることから、店頭での品揃えはかなり多様になっているものと思われる。

図表 57. 取扱のある鳥類の種類 (n = 251、複数回答)

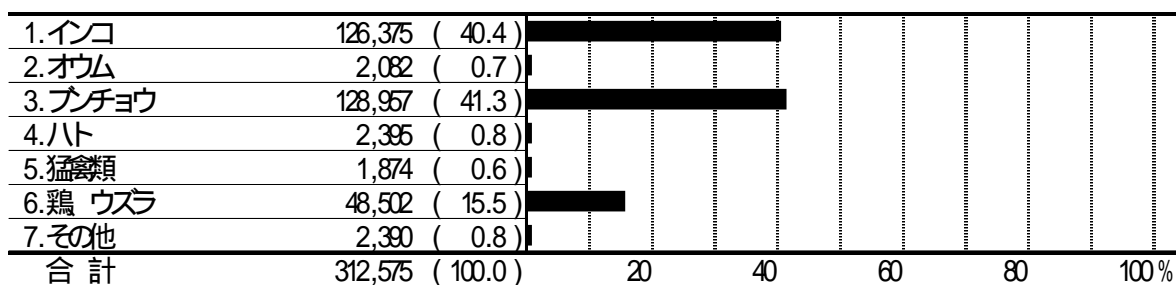


図表 58 は各事業者が仕入れた鳥類をその羽数でみたものである。鳥類の取扱数をみると「ブンチョウ」と「インコ」が主流となっている。次いで「鶏、ウズラ」が多くなっている。

なお、この羽数は流通経路にある全数ではなく取扱数の延べ合計であり、卸から小売に流れ、それが飼養者に渡れば同じ生体が 2 回カウントされる。

取扱事業者がやや多かった「オウム」や「ハト」は、実際の取扱数では「ブンチョウ」や「インコ」とは大きな差があることが分かる。

図表 58. 鳥類取扱延数 (n = 251、複数回答、単位：羽)



鳥類の仕入先を各事業者の業務形態ごとにみると、輸出入・卸業者は自社輸入のほかブリーダーからの仕入れが多い。また、卸売業者は輸入業者からの仕入れのほか、他の卸売業者からの仕入れも多くなっている。

鳥類では卸売業に自社生産が約6千羽、小売業を中心に一般個人からの仕入れが約2千羽みられる。この調査での確実な鳥類の国内生産数は、ブリーダーと自社生産の計の約84,500羽となる。この数は犬・猫を除く哺乳類や爬虫類に比べ多くなっている。

図表 59 . 業務区分別仕入先 (n = 251、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 自社で輸入	2. 輸入・輸入兼卸売業者	3. 卸売業者	4. せり市	5. ブリーダー	6. 自社生産	7. 一般個人
全体	回答者 頭数	432 310,404	12 115,829	72 50,644	174 52,466	40 3,840	40 77,378	36 7,155	49 2,894
1. 輸出入	回答者 頭数	9 180,128	4 113,355	0 0	1 460	0 0	3 66,313	0 0	0 0
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	22 29,223	3 451	5 10,930	6 10,284	1 6	2 1,491	3 6,006	2 55
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	14 7,855	3 1,442	6 5,795	2 412	0 0	2 206	1 0	0 0
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	56 54,336	1 328	13 23,375	13 20,075	5 172	7 8,260	7 540	7 1,518
5. 小売(+生)	回答者 頭数	321 38,771	1 253	48 10,544	151 21,210	34 3,662	23 1,088	22 609	37 1,275
6. 生産+その他	回答者 頭数	9 91	0 0	0 0	1 25	0 0	2 20	3 0	3 46

鳥類の販売先も輸出入・卸業者から小売業への流れが大きい。

図表 60 . 業務区分別販売先 (n = 251、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 直接販売	2. 小売業者	3. せり市	4. 卸売業者	5. 輸出	6. ペット目的以外購入者
全体	回答者 頭数	314 307,340	223 48,123	34 201,442	11 8,844	27 47,077	0 0	11 1,299
1. 輸出入	回答者 頭数	13 180,107	1 2,030	5 149,232	0 0	4 28,430	0 0	2 415
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	19 29,883	3 110	9 22,676	1 59	4 7,000	0 0	2 38
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	12 7,848	5 7,252	4 514	0 0	0 0	0 0	3 82
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	45 52,261	20 4,358	8 28,349	3 8,455	9 10,319	0 0	2 725
5. 小売(+生)	回答者 頭数	216 35,485	191 34,357	8 671	7 330	6 88	0 0	2 39
6. 生産+その他	回答者 頭数	8 1,756	2 16	0 0	0 0	4 1,240	0 0	0 0

図表 61 は、アンケート調査やヒアリング調査等に基づき、鳥類の流通経路を各流通段階に分けて整理したものである。

羽数ベースでみた流通量を多い順に 4 つまで整理すると以下の通りである。

- 「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 149,200 羽）
- 「海外」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 114,800 羽）
- 「ブリーダー」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 66,500 羽）
- 「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 34,400 羽）

鳥類の動物取扱業者輸入量は年間約 11 万 5 千羽である。

ペット動物の輸入については、大規模に取扱う数社の輸入業者以外は個人輸入に近い小規模な業者が多いことから、この約 11 万 5 千羽という数値は輸入数量のほぼ全体を網羅しているものと考えられる。

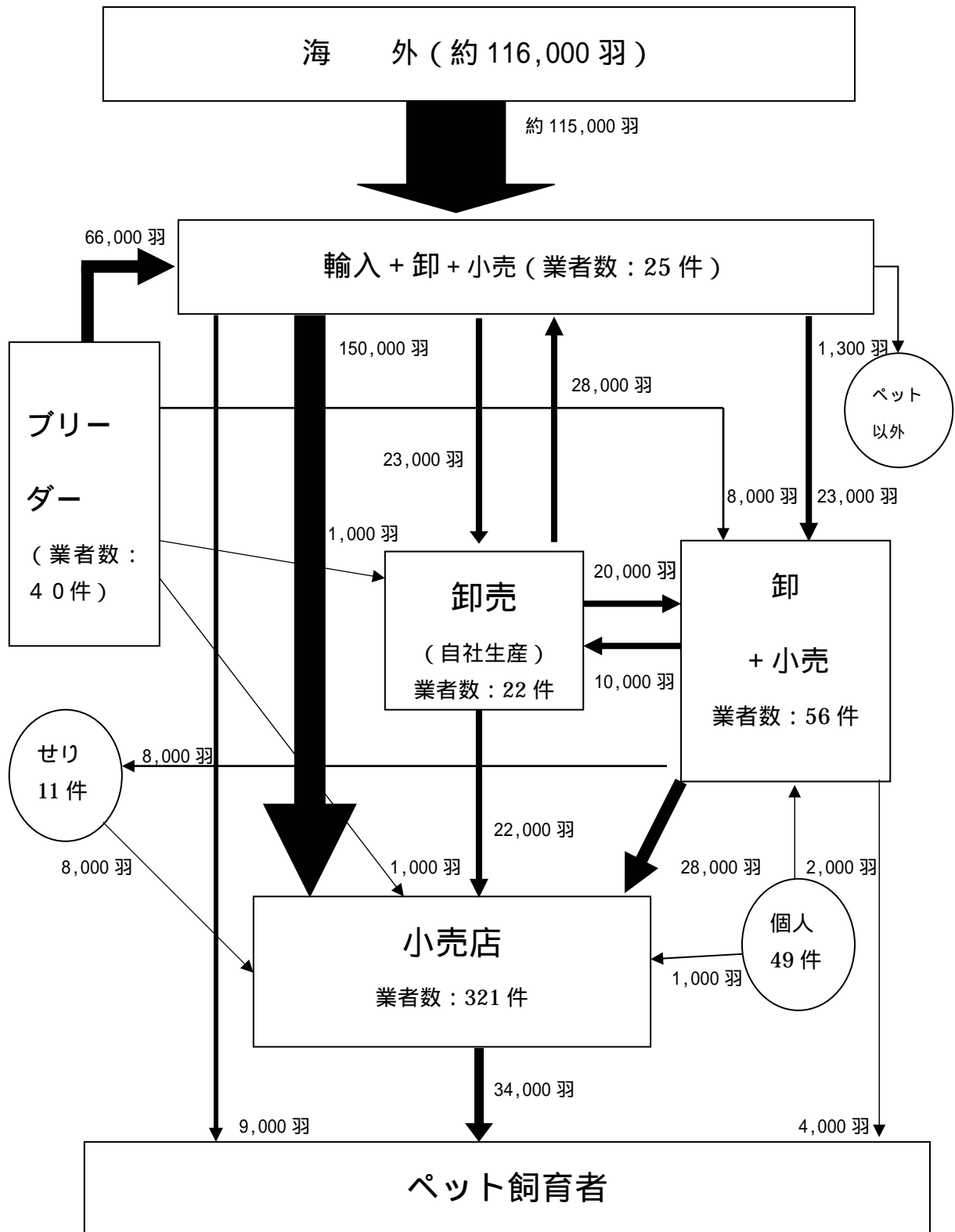
輸入されたペット動物の国内での流通については、そのほとんどが輸入・卸業者を経て小売店に流れている。一方、ブリーダー（約 7 万 7 千羽）や卸売の自社生産（約 7 千羽）など、国内生産も盛である。これは人気のある手乗りのインコやブンチョウなどの幼鳥が輸入では対応出来ないことによる。また、過去の鳥類ペットブームのときに鳥類生産を手がけた人が、現在も続けていることも影響している。規模は小さくなっているものの、農家が農閑期に出荷できるなど、手頃な副業として定着しているところもあり、国内生産の比率が高くなっていると思われる。

流通上に個人があるが、これは購入した動物を飼いきれなくなったものや、飼っているうちに増えた生体を、小売店に引き取ってもらうケースなどがあるという。

鳥類においても、犬・猫と異なり、すべてが生まれてすぐの取引ではなく、成長した生体の販売も多い。そのため、在庫の割合が犬・猫に比べて多く、また在庫期間に子供が生まれて増えることもしばしばみられる。これも卸売の自社生産にカウントされる。

この調査で明らかとなった輸入数と国内生産数を合わせると 20 万羽となるが、ペット飼養者へは 5 万羽弱しか流れていない。この差については、アンケート調査に回答した小売業者数がわずかに 321 件で、実際にはさらに多くの販売事業者がいることが主な要因と思われる。

図表 61 . 鳥類の主な流通経路

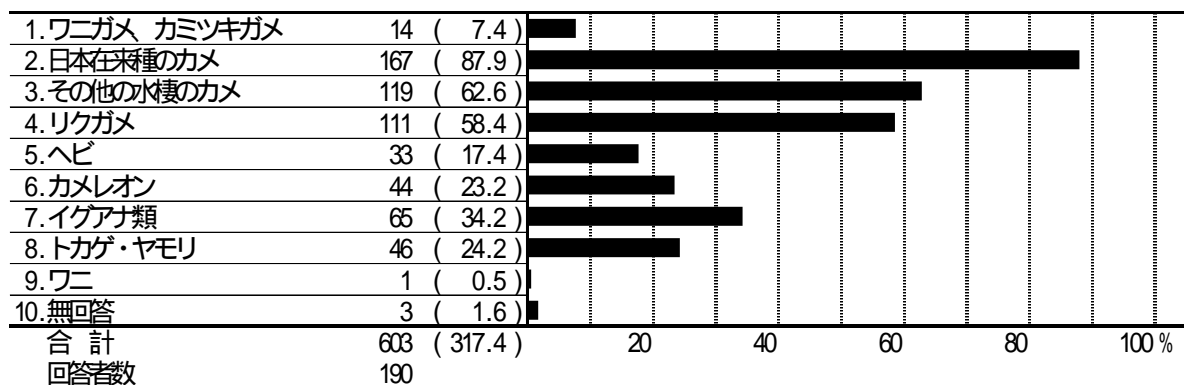


4. 爬虫類の取扱状況と流通経路

爬虫類を取扱う業者は回答業者 303 社中 190 社であった。この業者が仕入れた種類は多岐に渡っている。最も多くの業者が扱ったのが「日本在来種のカメ（イシガメ、ゼニガメなど）」で9割近い87.9%が回答している。「その他の水棲のカメ」が62.6%、「リクガメ」が58.4%となっている。

190 社が扱った爬虫類の種類の延べ数は 603 となり、卸から小売まで平均して 1 社あたり 3.2 種を扱っている計算となる。

図表 62. 取扱のある爬虫類の種類 (n = 190、複数回答)

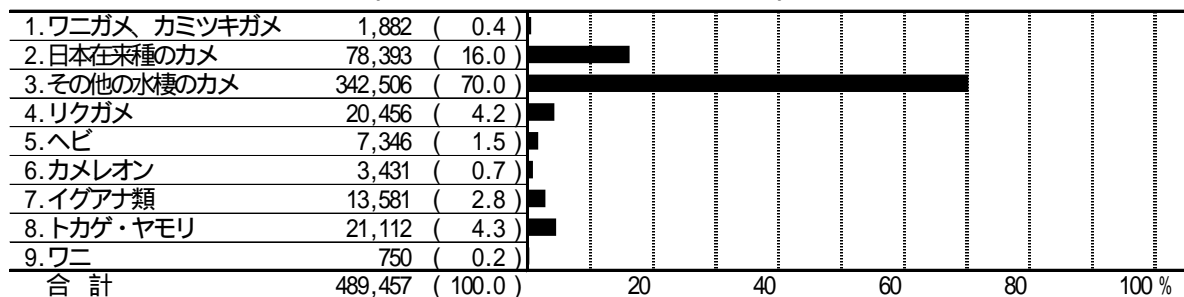


図表 63 は各事業者が仕入れた爬虫類をその頭数でみたものである。爬虫類の取扱種類では「日本在来種のカメ」が多かったが、実際の取扱頭数では「その他の水棲のカメ」が主流となっている。次いで「日本在来種のカメ」が多くなっているがかなり差がある。

国内での爬虫類の流通は「その他の水棲のカメ」であるミドリガメを中心に、イシガメやゼニガメなどのカメがほとんどを占めているのが実態であることがわかる。

なお、この頭数は流通経路にある全数ではなく取扱数の延べ合計であり、卸から小売に流れ、それが飼養者に渡れば同じ生体が 2 回カウントされる。

図表 63. 爬虫類取扱延数 (n = 190、複数回答、単位：頭)



爬虫類の仕入先を各事業者の業務形態ごとにみると、輸出入・卸業者は自社輸入が中心で、そのほか一部他の卸売業者や輸入業者からの仕入れがある。また、卸売業者は輸入業者からの仕入れが多く、他の卸売業者からの仕入れも一部ある。

爬虫類では自社生産や一般個人からの仕入れが少ないのが特徴となっている。この調査での確実な爬虫類の国内生産数は、ブリーダーと自社生産の計の約 4,400 頭で多くない。

図表 64 . 業務区分別仕入先 (n = 190、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 自社で輸入	2. 輸入・輸入兼卸売業者	3. 卸売業者	4. せり市	5. ブリーダー	6. 自社生産	7. 一般個人
全体	回答者 頭数	276 488,396	11 333,230	68 96,179	129 52,512	19 1,530	12 3,852	12 501	12 569
1. 輸出入	回答者 頭数	7 360,522	3 332,279	1 11,820	2 16,423	0 0	0 0	0 0	0 0
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	13 38,173	1 360	6 30,697	5 7,026	0 0	0 0	1 90	0 0
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	15 23,571	3 174	4 22,551	3 654	0 0	1 65	3 62	1 65
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	42 36,456	2 231	13 18,944	12 12,939	2 88	5 3,718	3 231	4 305
5. 小売(+生)	回答者 頭数	199 29,674	2 186	44 12,167	107 15,470	17 1,442	6 69	5 118	7 199
6. 生産+その他	回答者 頭数	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0

爬虫類類の販売先も輸出入・卸業者から小売業への流れが大きい。

図表 65 . 業務区分別販売先 (n = 190、複数回答)

問1 業務区分(パターン分類)		合計	1. 直接販売	2. 小売業者	3. せり市	4. 卸売業者	5. 輸出	6. ペット目的以外購入者
全体	回答者 頭数	236 480,518	163 59,459	27 331,932	6 12,096	19 74,986	2 34	7 2,011
1. 輸出入	回答者 頭数	9 356,631	0 0	4 292,959	0 0	3 61,849	0 0	1 1,823
2. 卸売(+生産)	回答者 頭数	14 37,099	2 6,354	8 20,997	0 0	3 9,658	0 0	1 90
3. 輸出入+卸売+小売(+生)	回答者 頭数	14 23,429	5 22,238	4 1,127	0 0	2 36	0 0	3 28
4. 卸売+小売(+生)	回答者 頭数	40 34,126	17 2,709	8 16,088	2 11,904	8 3,335	1 20	2 70
5. 小売(+生)	回答者 頭数	159 29,233	139 28,158	3 761	4 192	3 108	1 14	0 0
6. 生産+その他	回答者 頭数	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0

図表 66 は、アンケート調査やヒアリング調査等に基づき、爬虫類の流通経路を各流通段階に分けて整理したものである。

頭数ベースでみた流通量を多い順に 5 つまで整理すると以下の通りである。

- 「海外」から「輸入、卸」に向かう流れ（年間約 332,300 頭）
- 「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 293,000 頭）
- 「輸入、卸、小売」から「卸売業」に向かう流れ（年間約 61,800 頭）
- 「卸売業」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 30,700 頭）
- 「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 28,200 頭）

爬虫類の動物取扱業者輸入量は年間約 33 万 3 千頭である。

ペット動物の輸入については、大規模に取扱う数社の輸入業者以外は個人輸入に近い小規模な業者が多いことから、この約 33 万 3 千頭という数値は輸入数量のほぼ全体を網羅しているものと考えられる。

輸入されたペット動物の国内での流通については、そのほとんどが輸入・卸業者を経て小売店に流れている。ブリーダー（約 3,800 頭）や卸売の自社生産（約 500 頭）などごく一部国内生産があるが、爬虫類においては圧倒的に輸入が主流である。

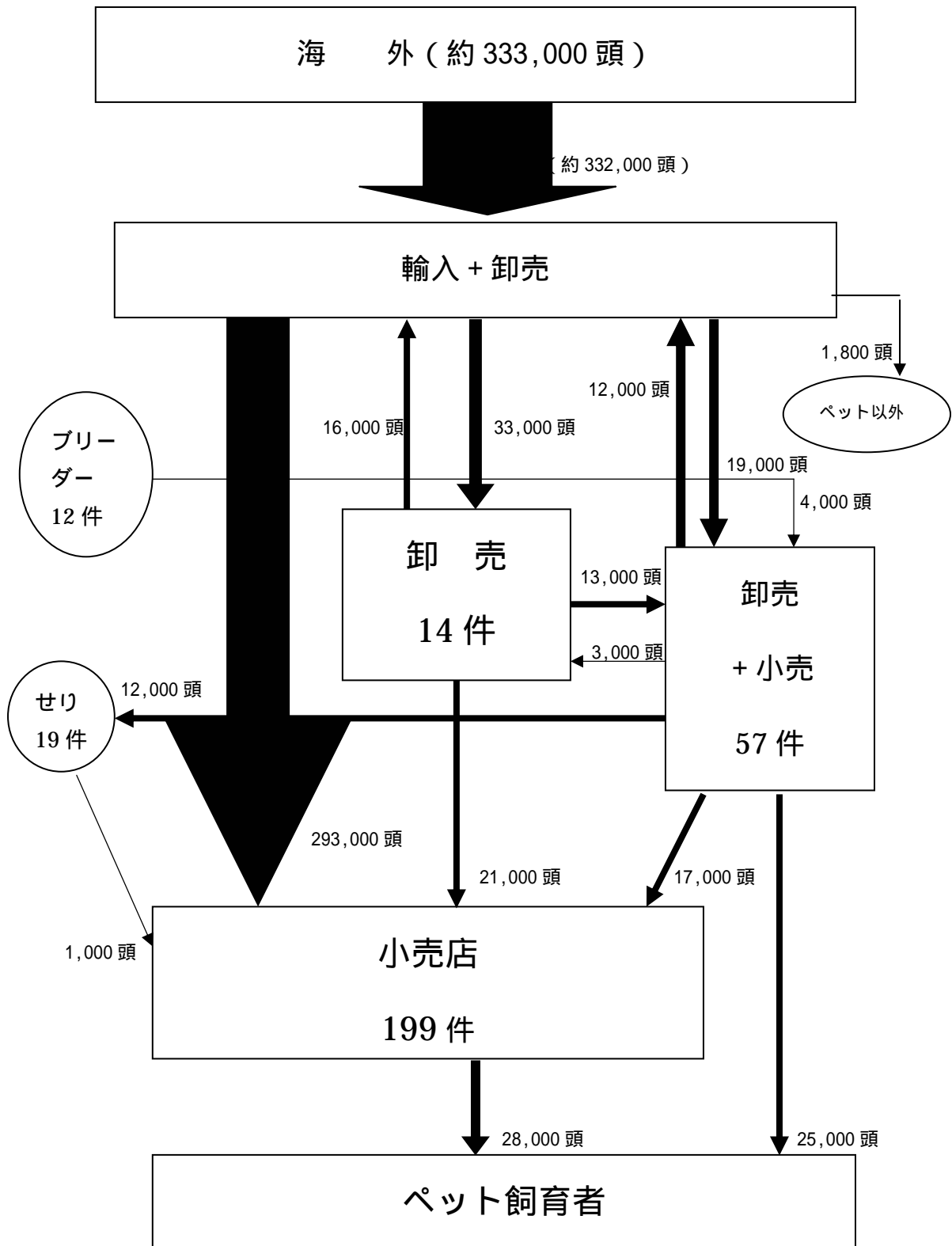
犬・猫を除く哺乳類や鳥類とは異なり、爬虫類の流通経路は比較的シンプルで、輸入業者が卸売業や小売業に販売し、卸売業者が小売業者に販売して、小売業者が飼育者に販売している。業者間取引は少なくないものの、ルートはそれほど複雑に絡み合っていない。輸入業者が直接小売りをすることが少ない点も、犬・猫を除く哺乳類や鳥類の流通経路と異なっている点に挙げられる。

また爬虫類では流通上に個人を表記していない。これは取引数の上では輸入された「ミドリガメ」と「イシガメ」、「ゼニガメ」などの在来種のカメが中心となり、個人との取引があるリクガメやトカゲ・ヤモリの割合が相対的に低くなるためである。同様にブリーダーや競り市の位置付けも小さくなっている。

爬虫類も犬・猫と異なり、すべてが生まれてすぐの取引ではなく、成長した生体の販売も多い。そのため、在庫の割合が犬・猫に比べて多く、また在庫期間に仔が生まれて増えることもある。

この調査で明らかとなった輸入頭数と国内生産頭数を合わせると 34 万頭近くになるが、ペット飼育者へはわずかに 6 万頭程しか流れていない。この差については、アンケート調査に回答した小売業者数がわずかに 206 件で、実際にはさらに多くの販売事業者がいることが主な要因と思われる。

図表 66 . 爬虫類の主な流通経路



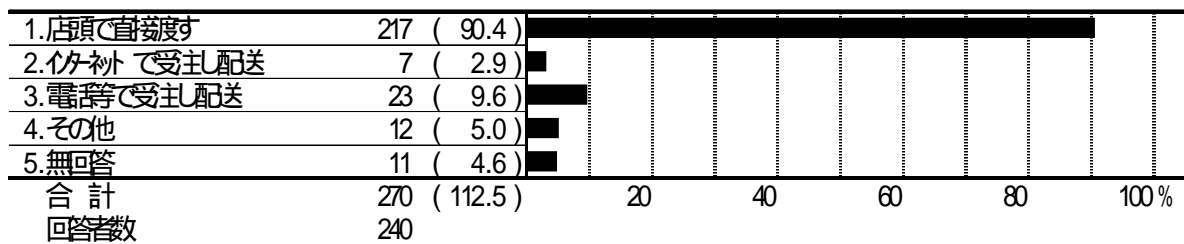
5. 哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の流通販売方法の特徴

生体の販売方法を動物の種類ごとに聞いたところ、どの種類においても「店頭で直接渡す（対面販売）」が9割でほとんどとなっている（図表 67、68、69）。

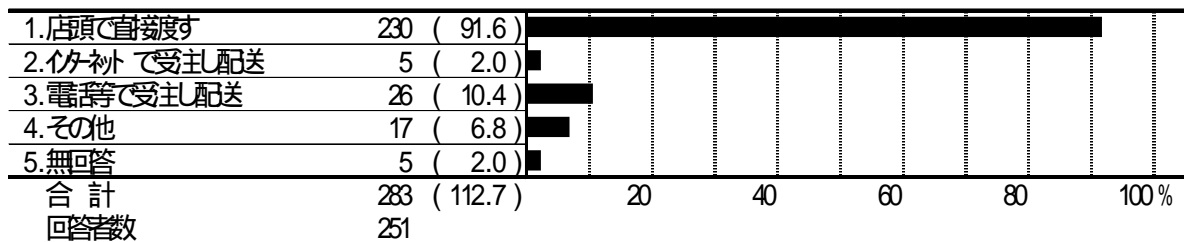
その他では「電話等インターネット以外で受注し配送する」が1割前後みられる。

「インターネットで受注し配送する」はまだ多くはない。

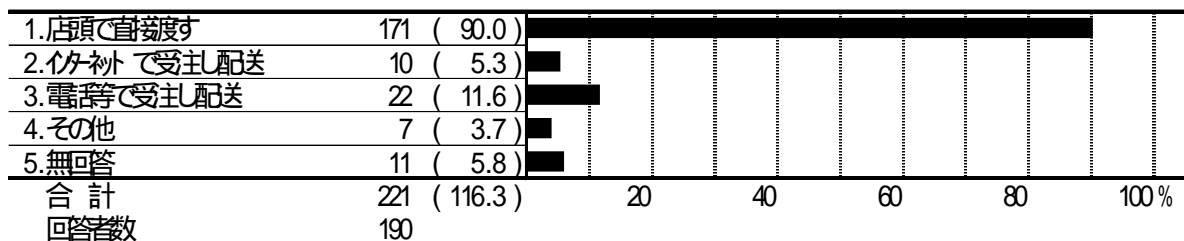
図表 67. 犬・猫を除く哺乳類の販売方法（n = 240、複数回答）



図表 68. 鳥類の販売方法（n = 251、複数回答）



図表 69. 爬虫類の販売方法（n = 190、複数回答）



6. インターネット取引

犬・猫以外の哺乳類、鳥類、爬虫類の取扱業者にインターネット取引の状況を尋ねたところ、インターネット取引をしている業者は15.2%であった(図表70)。

また、インターネット取引を行っている業者に、具体的な取引内容を尋ねたところ、「動物の販売」と「動物以外販売」が65%となるが、「動物の仕入」に利用する割合は30.4%、「動物以外の仕入」への利用も23.9%と少なくなっている(図表71)。

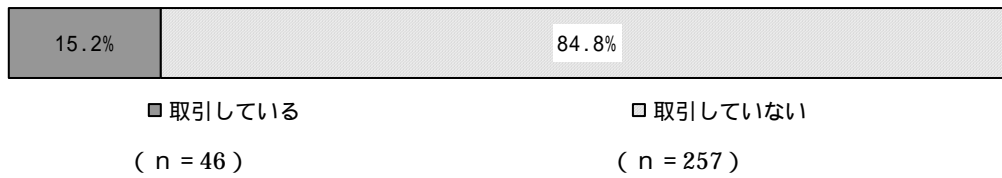
今後のインターネットでの取引引きについては「変わらない」が最も多く37.0%。次いで差がなく「増える」が34.8%となり、「減る」はわずかに4.3%である(図表72)。

なお、インターネット取引を「生体には利用しない」との回答が23.9%ある。

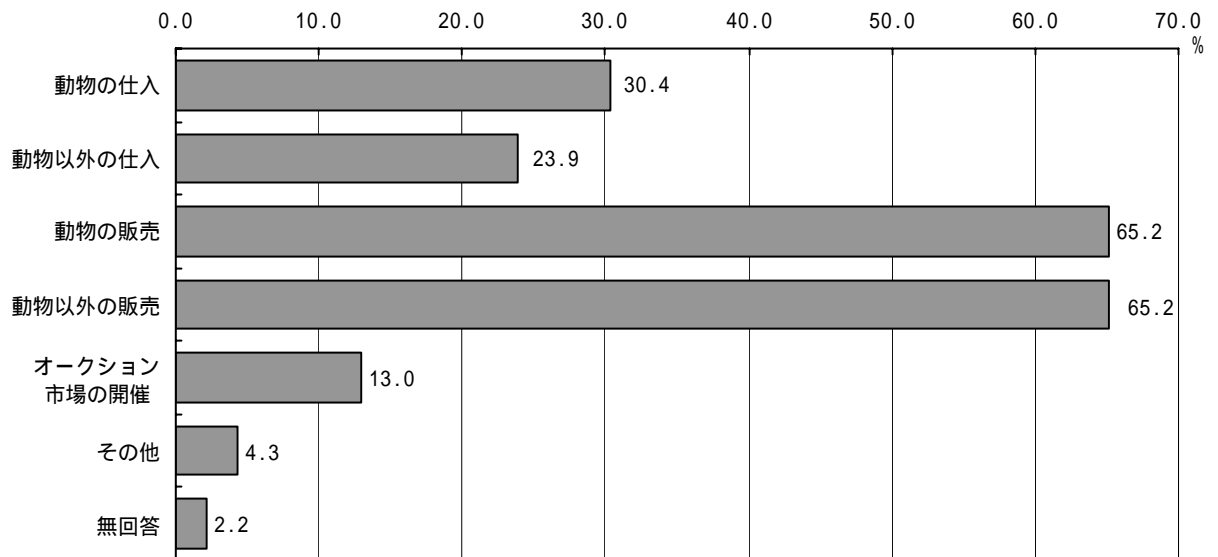
犬・猫以外の哺乳類、鳥類、爬虫類のインターネット取引は犬・猫の場合に比べ、それほど多くはないようである。

もっとも、ヒアリング調査の結果、爬虫類の一部は大きさや食餌などの条件で宅配に向いており、インターネット取引が積極的に活用されているという。

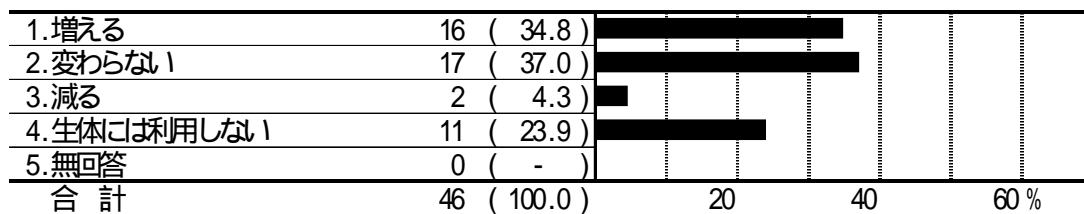
図表 70 . インターネット取引状況 (n = 303)



図表 71 . インターネット 具体的な取引内容 (n = 94、複数回答)



図表 72 . 今後のインターネット取引増減予想 (n = 46)



7. 今後の取扱意向

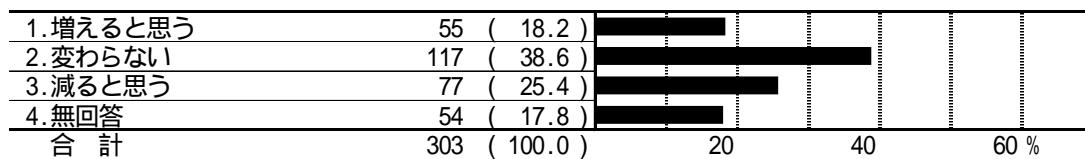
ここでは犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類について、その飼育者が今後どのようなかと予想しているか、今後取扱をどうするか、今後生体の取扱を増やしたい動物は何か、を見ていく。

(1) 犬・猫を除く哺乳類の今後

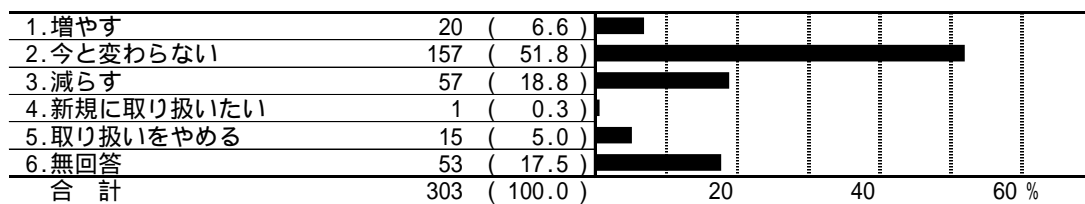
犬・猫を除く哺乳類については、今後の飼養者は「変わらない」が最も多く 38.6%。次いで「減ると思う」が 25.4%で「増えると思う」は 18.2%である。増えるという予想よりも減るとの予想が多くなっている。

自社の犬・猫を除く哺乳類の取扱数は「今と変わらない」が半数の 51.8%を占めている。これ以外では「減らす」が 18.8%、「増やす」が 6.6%で「取扱をやめる」が 5.0%となっている。変化は少ないが取扱を減らすとやめるの合計が 24%ほどになることから、全体としては減少傾向となる。

図表 73. 犬・猫を除く哺乳類の今後の飼養見込み (n = 303)



図表 74. 犬・猫を除く哺乳類の今後の取扱意向 (n = 303)



今後取扱を増やしたい動物には、「ウサギ」(13社)、「ハムスター」(7社)、「リス」(5社)、「フェレット」(5社)などがある。これらの回答は基本的な品揃えの充実指向と思われる(自由回答)。

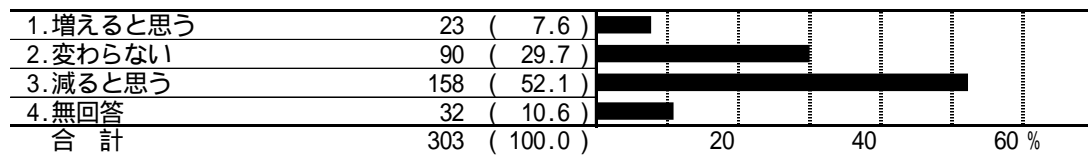
変わったところでは、「ジェルボア」、「マーモセット」、「フェネック」、「カワウソ」などが回答されている。

(2) 鳥類

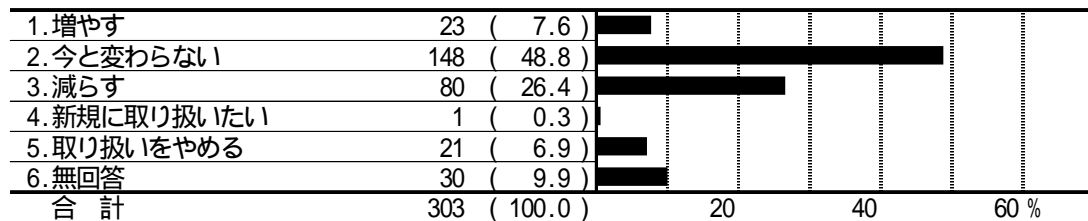
鳥類の、今後の飼養者の変化は「減ると思う」が最も多く半数以上の52.1%。次いで「変わらない」が29.7%で「増えると思う」は7.6%しかない。鳥類の飼養者数ははっきりと減ると予想されているといえる。

自社の鳥類の取扱数は「今と変わらない」が半数近い48.8%を占めている。これ以外では「減らす」が26.4%、「増やす」が7.6%で「取扱をやめる」が6.9%となっている。飼養者が減ると予想する人が半数以上なのに対して、今後の取扱の変化は少ないが、取扱を減らすとやめるの合計が33%ほどになることから、全体としては減少傾向となり、その割合は犬・猫を除く哺乳類を上回っている。

図表 75 . 鳥類の今後の飼養見込み (n = 303)



図表 76 . 鳥類の今後の取扱意向 (n = 303)



取扱を増やしたい動物には「インコ」(22社)、「オウム」(12社)、「ブンチョウ」(3社)、「フィンチ」(3社)、「フクロウ」(3社)がある(自由回答)。やはり売れ筋の強化という回答傾向と読める。

変わった回答では「烏骨鶏」、「走鳥類」がある。

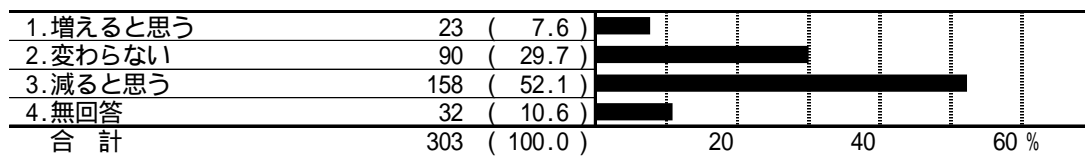
(3) 爬虫類

爬虫類の今後の飼養者の変化予想は、鳥類と全く同じである。「減ると思う」が最も多く半数以上の52.1%。次いで「変わらない」が29.7%で「増えると思う」は7.6%しかない。爬虫類の飼養者数もはっきりと減ると予想されているといえる。

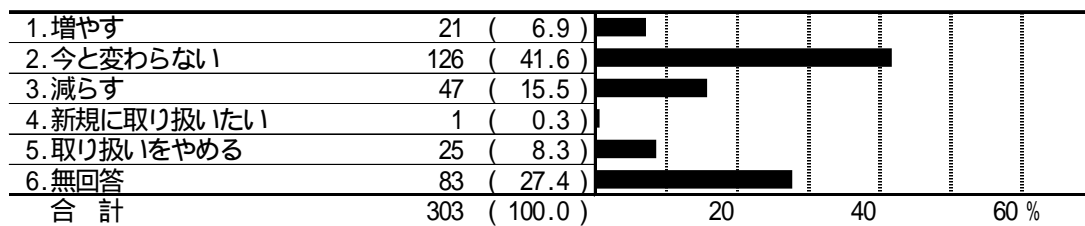
自社の爬虫類の取扱数は「今と変わらない」が41.6%で「減らす」が15.5%、「増やす」が6.9%。「取扱をやめる」が8.3%となっている。飼養者が減ると予想する人が半数以上なのに対して、今後の取扱の変化は少ないが、取扱を減らすとやめるの合計が24%ほどになることから、全体としては減少傾向となる。

流通する爬虫類の大半がミドリガメを中心としたカメ類であり、その点ではこの傾向に間違いは無いと思われる。一方、エキゾチックアニマルといわれるトカゲ・ヤモリなどについては今後も飼養者は増えると考えている人も多い。ただ、その数は爬虫類の流通全体から見ればわずかである。

図表 77 . 爬虫類の今後の飼養見込み (n = 303)



図表 78 . 爬虫類の今後の取扱意向 (n = 303)



取扱を増やしたい動物には「カメ」(18社)、「ヘビ」(7社)、「トカゲ」(7社)、「ヤモリ」(5社)がある(自由回答)。ただし今後取扱を増やしたい「カメ」は水棲ではなく陸ガメが中心となっている。